

## はしがき——研究の理論的な見取り図のために

本研究の目的は、子どもの「貧困の経験」(children's experience of poverty)とその帰結を示すことにある。「子どもの貧困」という特別な貧困と、その経験(experience of Child Poverty)があるのではなく、構造的に私たちの社会に存在する貧困という問題に対して、子どもや若者の視点から理解を図ることが中心的な課題となる。これは、子どもの視点から貧困問題の理解を深めるひとつの試みである。

貧困は世帯を単位に把握・検討されることが基本だが、その経験は個別的な問題である。特に家族のなかにある子どもが、貧困状態の生活におかれることでどのような影響を受けるのか、その不利と困難は子どもにとってどのように現れるのか、それは世帯を単位にしていると容易には見えてこない。また、貧困のなかにある生活を子どもがどのように認識し、子どもにとってどのような意味があるのかは、子どもを主体にして子どもの視点から理解する必要がある。このように、子どもの問題を「貧困の経験」という概念を中心に描くことが本研究の主題となる。

一般的に「経験」とは、人が主観的な体験や感覚や内省を通じて得るもの、あるいはその獲得過程を意味する。経験は必ずしも現実のなかでの実体験を必要とせず成立しうる概念である。しかし、本研究で主題とするのは「貧困の経験」である。子どもの貧困の経験という視点は、特に経済的困窮のなかでの物質的基盤に基づく子どもの生活に対する認識と主体性を捉える視点として定義したい。子どもは貧困のなかにある生活の現実をどのように感じ、受け取り、理解し、意味づけているのか、そのことと相互作用的に、どのように自己認識や社会関係もち、主体的な行為や選択として貧困のなかにある生活に対処していくのか、そのことを子どもの貧困の経験として捉えていきたい。

これまで、イギリスの貧困研究においては、歴史的に「貧困の個人責任論」や「貧困の文化的再生産論」に対して、社会的・経済的要因といった構造的現象として貧困を捉え、その要因を量的に把握する研究が積み重ねられてきた経緯がある。それは、貧困におかれた人々の行為(ふるまい)や決定(選択)に貧

困の原因をみる視点 (Blaming the Victim) に対して、貧困問題の構造的側面を強調し、再分配を中心とした政策的対応の必要性を訴えるための大きな力となってきた。しかし、そのことが一方で、貧困のなかで生きる人々の具体的な困難としての、制約や恥辱の感覚、あきらめや無力感のような声や力を失う状態、個々人の生活実現の主体的な対処や格闘などを理解することを後回しにしてきた側面がある。「貧困の経験」はこの点に関してのアプローチを可能にする視点となる。

このように述べると、読者の多くは「構造と主体 (Structure & Agency)」の問題の、特に主体の側に焦点のあたる研究として理解されるかもしれない。貧困を個人の経験から考えるとすれば、むしろそのような受け止め方は当然だろう。貧困研究においても、多くの人にとって貧困状態を経験することはこれまで考えられていたよりも流動的であり、貧困線上を上下する可能性のあること、少なくとも貧困から脱する主体性の発揮の余地のあることがパネル調査によって示されてきた。人々は単なる構造の犠牲者ではなく、主体性を発揮する存在と考えることには妥当性がある。特に支援論や当事者論の立場からは、主体的行為の可能性を把握する点に力点をおくことこそ重要な観点だという指摘や、構造の力をあまり強く描き出すことで人間の可能性が構造に規定されるように受け止められてしまう懸念もあろう。しかし、パネル調査の結果からはまた、現実には貧困・低所得層の線上を上下する者が多いことが示されており、主体的行為が構造を簡単に乗り越えられるということの意味してはいない。

貧困は人々の主体性を制約するが、規定するわけではない。ここに主体的行為の意味があるが、それは無条件に行使できるわけではない。もし「制約」が許容できない生活状態の維持継続に関わっているなら、やはりそれは社会問題であるということであろう。この点にこそ貧困の構造的な側面を視野に入れない理由がある。貧困状態におかれた子どもは困難のなかにあっても自らの生活を組み立てようとする主体性を発揮する力が失われているわけではない。構造のなかでの制約を経験し選択肢と可能性が狭められていることと、エージェントとしての力をもっていることとは矛盾しない。だからこそ、貧困問題の構造的側面の影響と力を十分に組み込んだうえで、個人の主体的行

為を理解しなければならない。そのことを踏まえて、本研究では貧困の構造的側面に焦点をあてつつ「貧困の経験」を理解していく構成をとる。

このような構成のあり方には、ポストモダニティ的な立場からも批判があるかもしれない。子どもや若者はもはや単一の世界ではなく、個人の属するコミュニティと同時に大衆文化のなかに、経済的排除と同時に消費社会のなかに生きており、社会階級アイデンティティをことさらに内面化しているわけではない。また、相対的貧困のなかに生きることは、生活の部面のすべてが欠如しているのではなく、個々の家庭や子どもの価値観や生活実現の方向性に応じて、あるものは欠け、あるものは（かろうじて）満たされているのであれば、なおさらである。そういった多様な生活経験を構造の力のなかに還元しようとしているように受け取られてしまうかもしれない。そういう点で、複雑な主体性をもつ一人ひとりの経験を貧困のなかでのそれとして、主体の側から固有の経験として描き出すことも可能かもしれない。しかし、「貧困の経験」はけっして個別の個人的経験に還元できるものではない。それは社会政策としての貧困対策を個々バラバラな対応の必要性として解体してしまいかねない。社会階級や社会階層、あるいはジェンダー等が人々の生活機会の不平等を生み出しており、貧困に対する社会保障の枠組みは依然として人々の生活を支える基盤であることに変わりはない。解決すべき問題として貧困に向き合うのなら、生活を安定させる基盤となる社会政策の充実のもと、個々人の多様性やニーズに応じたパーソナルな対応の必要性を組み合わせるべきではないか。そのための基礎的な知見を得るためにも、本研究では構造の側に焦点をあてつつ主体性を捉える構成をとっている。

また、個々人が貧困に対抗し脱するには、そのための条件について考える必要がある。生活実現における個人の主体性を認識することは、自身の生活をコントロールすることの責任を認めることでもある。これは貧困の自己責任論と結びつきやすい。しかし、生活実現は無条件にできることではなく、誰しものが自身の生活のコントロールの責任をもつだけの基礎的な条件の充足が前提として必要であり、また、その責任は無制限に問われるものではないということが社会の共通認識のなかにおかれなければならない。特に子どもや子ども期の特

徴を考えれば、自身の生活を実現していく力の涵養のためには、失敗することを含めた試行錯誤が可能となる選択の幅を保障することの重要性と、そのための生活条件まで含めて考えていく必要がある。そういう点で、生活実現の基礎的な条件としての所得と資源の再分配のあり方を問うことが重要となる。また、生活実現は再分配による生活条件の確保だけでは必ずしも十分ではない部分がある。構造側から主体をみることで、再分配による生活条件への政策的対応の必要性に加えて、再分配だけでは解決しえない実際の生活の組み立ての困難への対応やソーシャルワーク的な支援の方向性も示せるだろう。人々が行為における主体性を発揮して貧困状態から抜け出す可能性を高めるためには、むしろ構造の側のあり方をきちんと理解しておく必要がある。

このように、「貧困の経験」に焦点をあてる貧困研究は、社会・経済的要因といった構造的現象としての貧困を集散的に示してきた量的調査の知見を踏まえたうえで、そのことが個人の経験に与える意味と影響を把握する必要がある。この点に関してリスターは、貧困のなかにある人々の生活実践を理解する視点として、階層化された社会や社会的権力関係のなかに位置づけられた個人が物質的資源や力の欠如によって制約を受けつつ、いかに主体として自らの生活をコントロールしているかという「構造の中でのエージェンシー」の枠組みを示している。本研究でもリスターの「構造の中でのエージェンシー」という観点を参照して論を進めていきたい。貧困に関する議論のなかで、一般論としての貧困における構造の制約はこれまでも言及されてきたところだが、個人の具体的な経験から貧困における構造の制約を示す点に本研究の意義がある。

この「構造の中でのエージェンシー」を捉える視点として、本研究では「資源の不足・欠如としての貧困」に着目している。私たちは生活をどのように実現するかという行為の目的に合わせて資源を選択するのではなく、むしろ自分の持てる資源（手段）によって実現できる生活の幅を決めていく側面がある。現実的にはそれぞれのおかれた状況や状態と持てる資源という条件が選択の幅を制約する。貧困状態におかれた人々にとって、制約のなかでの資源のやりくりや対処はより困難なものとなる。このような資源の調達と組み合わせによる生活実践の困難を明らかにすることで、「構造の中でのエージェンシー」の一

側面を捉えることが可能になるだろう。また、人々の生活実践は必ずしも経済的な合理性にのみ基づいているわけではない。生活の実現を図る主体として経済的に合理的な人間を想定するのではなく、「行為における主体性は社会的・文化的文脈のなかで実現される」（リスター）という点からも主体性を理解する必要があるだろう。この点に関して、本研究では特にジェンダー視点を一部取り入れて、人々の選択と評価と判断に対する社会的・文化的な影響の把握を試みている。

以上のように本研究は子どもの「貧困の経験」を「資源の不足・欠如としての貧困」から明らかにすることがひとつの枠組みとなっており、そのことで「構造の中でのエージェンシー」を捉えていきたい。背景には、「貧困の世代的再生産」の問題と関連して、構造と主体の両面を理解できなければ貧困のなかにある子どものライフチャンスの不平等を明らかにできないという問題意識がある。子ども自身が主体的に自分の人生を実現していく可能性をライフチャンスと捉えるなら、子ども期から若者期までの長いスパンのなかでの主体性の発揮の実際を理解していく必要がある。はたして貧困におかれた生活のなかで、子どもはどのような認識をもち、それは生活の組み立てにどのように関係しているのか、そしてそれが子どものライフチャンスの実現につながるのか、そのことを明らかにしていきたい。

より具体的な研究課題として、第1の課題は子どもの視点からみた貧困の生活と認識を明らかにすることである。第2の課題は子ども期と若者期の「いま」の積み重ねとライフチャンスの実現の実際を示すことである。貧困のなかにある子どもの生活を検討することで、子どもにとっての貧困の経験を明らかにし、その子ども期の経験と若者期の経験の連続性を検討することで、子どもにとっての貧困の経験が貧困の世代的再生産につながることを示していく。本研究のひとつの大きな特徴は、8年間にわたる継続調査を実施していることである。そのことで、子ども期からの不利の継続と、貧困の世代的再生産を動態のなかで捉えることができる。

章構成としては、序章で「子どもの貧困の経験」について概念的な検討を行

い、子どもの貧困の経験の理論的枠組みを提示する。次いで、第1章では、「子どもの貧困の経験」を明らかにするために「資源の不足・欠如としての貧困」という研究の分析視角と方法を提示する。具体的な課題の検討は2章から5章にかけて行う。まずは第2章において、子どもの生活と家族の持つ資源の関係を、量的調査データを用いて示していく。そこではケアの社会化の観点を含めて子どもの生活を取り巻く構造的な問題についても触れる。それから、貧困のなかで子ども期を過ごした若者に対するインタビューデータを用いながら、第3章（子ども期）および第4章（子ども期から若者期へ）では、資源の調達と組み合わせによる生活実践の困難を当事者の視点から明らかにしていく。第3章では「子どもの貧困の経験」の実証を、第4章ではその影響と継続性が若者期のスタートを形作っていくことを示す。最後に第5章で、これら子ども・若者各期をライフコースの観点から整理し直して貧困の世代的再生産の現実を示していく。第1の課題は2章、3章、4章を中心に、第2の課題は4章、5章を中心に検討される。終章では、子どもが自分自身のものとしてライフチャンスを実現していくための基盤をどのように構築すべきか、子どもの視点からの貧困の理解と、政策の方向性についてまとめの議論を行う。